No. J2217

第15回　国際考古動物学会　南西アジア分科会（ICAZ-ASWA）の開催

「家畜と牧畜文化の東ユーラシア・東南アジアへの伝播と受容過程」

（International Council for Archaeozoology, 15th Meeting on Archaeozoology of Southwest Asia and Adjacent Areas

"Spread of animal husbandry to Eastern Eurasia and Southeast Asia"）

総合研究大学院大学統合進化科学研究センター　准教授

本郷　一美

西アジアでは、1万年以上前に狩猟採集から食料生産へと人類史における大きな転換が起こり、その後の文明の発達や国家の形成の基盤となったとされる。この地域の考古学調査の中で、1970 年代から家畜化を中心テーマとする動物考古学の研究が盛んに行われ、この比較的新しい分野の研究手法の発展につながった。欧米を拠点とする調査隊が多くを占めてきたなかで、日本隊の発掘調査の成果も高く評価されてきた。国際考古動物学会（ICAZ）南西アジア分科会（ASWA）は、西アジアとその周辺地域（北アフリカ、バルカン半島、コーカサス、南アジア北部―中央アジア）の考古遺跡から出土する動物骨や意匠、現代もみられる伝統的な家畜飼養などをテーマとする研究者が集う学会で、隔年で開催されてきた。第15回大会は東アジアでの初めての開催となった。

基調講演では東京大学、筑波大学による西アジア考古学調査の紹介に続き、中世都市の生業や交易の研究の重要性に関する講演があり、続いて旧石器時代から現代まで様々な時代に関する最新の発掘調査や研究成果の発表が行われた。中国の厳しいコロナ対策の影響で、西アジアー中央アジアー東アジアの関係をテーマにしたセッションは縮小せざるを得なかったが、中国在住の研究者のビデオ発表での参加が実現した。研究発表の他、期間中に東京国立博物館、東京大学インターメディアテクの見学を実施し、希望者のみのエクスカーションでは仙台周辺で縄文時代の貝塚・博物館、地底の森ミュージアム、東日本大震災の震災遺構を見学した。

ポスター発表を含めた参加者と聴講者は日本を含め19か国から約70名だった。政治的な理由による入国制限がない日本で、イスラエル、イラン、アメリカ、レバノン、アルメニア、トルコ、ギリシャなど複雑な政治的関係を抱える国々の研究者が交流し研究成果を議論できたことは最大の成果であった。

ASWA は設立当初から学生の参加を奨励し、親しみやすい雰囲気の中で自由に議論することを特徴としてきた。りそなアジアオセアニア財団の助成により欧米の大学院生やイラン・トルコの若手研究者の参加が可能となったことを心よりお礼申し上げます。